

■お得意に帰省

新型コロナウイルスの影響で会員の皆さんのなかには、なかなか帰省できていない方も多いのではないのでしょうか。また、宿泊業をはじめとした村の観光業も依然として厳しい状況が続いています。

そこで、村では令和3年度限定でふるさと応援団木島平会の会員向けに村内の宿泊施設にお泊りの際の助成事業を行います。

1泊2000円を上限に同行者3人まで助成の対象となります。
令和3年度限定の事業ですので、この機会にお得意に帰省しながら、村観光業の支援もお願いします。詳しくは、同封のチラシをご確認ください。

○対象者 ふるさと応援団木島平会の会員及び同行者

○支援額 ひとり 2000円/泊

○対象施設 木島平村内にある宿泊施設

○利用方法①宿泊施設予約後、事務局へ宿泊日・人数等を連絡。

②事務局より宿泊券を発行し、利用者へメールまたは郵送。

③利用者は宿泊の際、宿泊券を提出し割引後の料金を支払う。



■空き家はありますか

村内では約170件の空き家があり、その中には適正な管理がされていない空き家も多くあります。住まなくなった家や管理が不十分な家は劣化が進み、売りたいくても売れなかったり、解体にも費用がかかるため悩んでいる方もおられます。また、一方で移住したい方や結婚等で家を探している方がいても、村内では物件がなく、村外へ流出してしまうこともあります。

そこで、両者をマッチングする「空き家バンク」という制度があります。空き家バンクに登録することで、家を探している方へ情報が届きやすくなるだけでなく、家財の搬出・清掃、改修にかかる費用への助成が受けられるようになります。会員の皆様の実家やご親戚で空き家になっている家がありましたら、空き家バンクに登録してみてください。いかがでしょうか。また、空き家だけでなく、土地(宅地)の登録も可能です。詳しくは移住定住推進係までお問い合わせください。

また、ふるさと納税の返礼品のなかには、空き家の管理(見回り)草刈り代行をするサービスもあります。コロナ禍で帰省ができず、管理できない場合など活用してみたいかがでしょうか。



会報原稿募集中!

【毎月5日までに左記へご送付ください。】

【送付先】〒389 2392 木島平村役場内 ふるさと応援団事務局

FAX 0269 824121

✉ seisaku@vil.kijimadaira.lg.jp



寄稿

海外出張回想録

渡辺 広明（糠千出身）

とある日、上司から海外出張を命じられた。え!! 身体が一瞬硬直した。どこですか。アラブ首長国連邦（UAE）のラス・アル・ハイマという所だ。何をするんですか？セメント工場を新設する為の調査関係、先ずエリア確定、工場から港まで製品搬送用のベルトコンベアルート確認作業（延長約2km位）であること。

先ずは情報収集になるが当時は大変であった。最近ではインターネット、スマホ等で瞬時に確認できるが、その頃計算といえは電子計算機はあったが、IBMのFORTRAN言語でプログラム作成をしなければならず、一般の人に中々手の届く所になかった。せいぜいそろばん、計算尺、タイガー計算機、真数表、対数表の時代でようやく卓上計算機（関数付き）が市場に登場する頃であった。

機材準備、材料準備、インスタント食品、米等々をリストアップして箱詰めしインボイスを作成した。3か月以内の滞在期間ということ、観光ビザでの入国となった。渡航準備が整い出発が決まった。1977年10月東京国際空港からマニラ、クアラルンプール経由ドバイ空港KLM空港南回り空路であった。搭乗手続きを終え、真紅の絨毯を踏みしめてゆっくり歩き、出国手続きに向かった。免税店にて、すぐにカミュのナポレオンを2本購入した。これが後に大変深刻な窮地に置かれる状況になる。マニラ空

港トランジェットにて通過した後ハイジャック事件が生じる。ルフトハンザ航空181便乗員乗客を人質にしてキプロス島のラルオカ、バーレーン、ドバイと転々とした。ドバイ空港にハイジャック機が停泊していたため空港が閉鎖された場合はギリシャへ飛ぶと機内放送があった。行先には心配はあったが辛うじて空港に着陸できた。ハイジャック機は空港の片隅に着陸していた。アラブ首長国連邦にいいよ入国だ。

乾いた空気と独特な匂い長い行列が入国手続き順番待ちしている。先方で自国民らしき人がアルコール瓶らしきものを大声で怒鳴られ、割られている。えっ!! 隣国のサウジアラビアではアルコール類一切持ち込み禁止されているらしい。俺のナポレオンの行方は。また別の列では白人が大声で怒鳴り合っている。金のライターらしきものを投げつけて行ってしまった。自分も気が気でない。どうしようか。頭を抱えている所に体のがっしりした大男で政府の役人らしき人が近づいてきて「セメント工場のプロジェクトで来たのか」と話しかけてきた。そうだと答えると、税関を通らず通過できた。他国の政府の力は偉大だ。その頃のドバイはまだ、ホテルインターナショナルが一軒ポツンと丘の上にあるだけの状態であった。宿泊料金は当時1泊1万数千円であった。料金が高いので日本から持ち込んだ米を炊いたり、湯を沸かしてインスタント食品にくらいついていた。たまにホテル内のレストランでDDビア（生ビールのようなもの）を飲んだときは天にも上る思いだった。ドバイからラス・アル・ハイマの通勤は小型マイクロバスで毎日百数十km離れていた道のりを走った。途中は何もなく延々と土漠が続いているだけだった。現地人は羊やヤギを追い回し遊牧民の生活を送っていた。肩からライフル銃を下げていて、怖くて近づけない。キャンティーン（売店のようなバラック小屋）でミネラルウォーターを買うのが日課であった。先入観を

持つて判断すると簡単に騙される。仕事帰りに立ち寄った八百屋で旨そうなスイカを見つけた。「オヤジ、これウオーターメロンか」と聞くと2つ返事で「イエス、ウオーターメロン」と返ってきた。野菜はグラムで販売なので高かった。ホテルに帰り食後楽しみに包丁を入れる。あれ、冬瓜ではないか。やられた。

現地でサーベイヤー1人（インド人）とレイバー十数人（パキスタン人）を雇った。ところが、カースト制度が強く、どんな作業をするにも全員いないと作業ができない。簡単にいうと仕事を与えるとすぐに役割分担が決められ、お互いに協力して作業しようとしれない。自分の役割以外には絶対手を出さない。日本人には理解不能。現地で感じたことは、金製品が安い、税金がない、産油国であり金額の3分の1は国王に、3分の1は公共事業に、残りは国民に分配されると聞いている。ただ、産油国で緑も何もなく、どうしようもない国と思っていたが、現状では観光地として世界のトップを走っている。娯楽がなにもない、映画館が1軒あったが、天井がなく夜間しか上映できない状態であった。

現地入りして3か月近くたち現地作業も大体になったので帰国する運びとなりました。ドバイを飛び立ちシンガポールで乗継のためチェックインカウンターで明日の搭乗を確認するとノーブツキングと言われ、危ない、ルンルン気分でしたら翌日搭乗できなかった。

シンガポールの夜を堪能し翌日無事に搭乗でき、帰国することができた。到着ロビーを出ると事務屋さんの奥さんともどもが迎えに来ていた。主人がみつからないと言われ、探したが見つからない。航空会社で搭乗者名簿を調べてもらったら名前の記載が無かった。その後お会いしたことがないので状況がわからない。別件ではヨーロッパで業務終了後、1年間行方不明になり大騒ぎになったこともあり、時たま発生するようだ。